

5. 考察

各遺跡から出土するAタイプとBタイプ間の差異は、各遺跡における出土数の観点からすると地域差が伺える。時期差に関して、ベトナムでは土器編年が完成していないため放射性炭素年代を一つの指標にした場合、現時点では明確な差異が現れない。よってAタイプとBタイプ間の差異は地域差と考えるのが妥当であろう。

各タイプにおける形態間の出土状況の違いに関して、形態2（長胴形甕棺）はコンラン、タムミー遺跡での出土が目立つ。ゆえにコンランからタムミー遺跡の分布する地域の形態と考えられる。形態7（広口壺形甕棺）に関しては南部東域のゾンカーヴォ、ゾンフェ遺跡で出土数が突出し、また形態10（有肩甕棺）もゾンカーヴォ遺跡のみで出土するため、両遺跡の所在するドンナイ川河口域では他形態の甕棺が出土する遺跡とは異なる甕棺葬伝統を営んでいたと考えられる。有肩甕棺の形態13がドンナイ川河口域で出土せずビントゥアン省内の遺跡に集中する状況からも明確な地域差が伺える。

6. おわりに

以上よりベトナムで出土する甕棺は2タイプに分けられ、その差異は中部と南部の地域差に依拠していると考えられる。また各タイプ内において細分化が図れるが、Aタイプにおいては時間的変遷及びさらに詳細な地域性が伺えるであろう。Bタイプに関しては、ドンナイ川河口域独自の甕棺葬伝統の存在を指摘できる。以上より現時点で、AタイプとBタイプを同一の文化、つまりサーフィン文化

として扱うことには賛成できない。今後は各形態の型式編年と各形態間の関係について研究を進めていく。

下総台地の環状ブロック群の研究

小原 俊行

はじめに

日本の後期旧石器時代前半期には環状ブロック群という円・楕円形に石器集中群が分布する構成がある。環状ブロック群は発見当初から当該期の生業・集落形態と絡めて論じられている。それは「環状ブロック群内の石器ブロックが複数グループに分かれる場合、そのグループは集団又は世帯を表す」という前提があったからである。しかし、この前提の根拠は今まで具体的に明示されなかった。今回は環状ブロック群の分析を通して果たして集落論を論じることが可能なのか検証した。

分析方法

今回の分析では等密線分析、類似度指数分析、石器モード分析、母岩消費分析の四つの方法を用いた。

等密線分析は報告者によって基準が異なる石器ブロックの認定方法を客観的な視点から設定し直すために用いた。50cm×50cmのグリッドを環状ブロック群に設けて石器点数からメッシュマップを

作成し、同一点数のメッシュで線を結び、等密度線を作成した。

類似度指数分析とは石材の種類・母岩と石器点数から環状ブロック群内の各石器ブロックの石材構成の類似性を算出するものである。これにより石器ブロック間の石材構成をより客観的・視覚的に比較することが可能となった。

石器モード分析は石器ブロック内にある石器製作技術を把握するための方法で、石刃、剥片、両極、石斧の四つのモードを設定した。

各モードの分布状況を説明するには「母岩消費」と「搬入」という用語を用いた。「母岩消費」とはその石器ブロックで石器製作・再加工のために石材消費が行われたことを指し、それ以外は「搬入」として捉えた。

分析結果

下総台地上に分布する環状ブロック群は三五遺跡、四六地点が報告されている。この内、右記の方法の分析が可能な環状ブロック群を抽出した。南三里塚宮原第1遺跡、押沼大六天遺跡、中山新田I遺跡、坊山遺跡、瀧水寺裏遺跡、出口・鐘塚遺跡の六遺跡八地点である。分析の結果を基にこれらの環状ブロック群を三類型四細分に区分した。

I類は南三里塚宮原第1遺跡第1地点、押沼大六天遺跡、中山新田I遺跡、坊山遺跡のものが該当する。これらの環状ブロック群では、石器モードによる分析で二つの母岩消費地群が対向関係を持つ

ように配置する点で共通する。南三里塚宮原第1遺跡第1地点と押沼大六天遺跡では類似度指数による分析でも同様の傾向にあるため、Ia類と細分した。また、中山新田I遺跡と坊山遺跡の環状ブロック群は類似度指数によるグループ化では全域が同一グループになる傾向が強いため、Ib類とした。

II類に分類した環状ブロック群は南三里塚宮原第1遺跡第2地点南側環状ブロック群、瀧水寺裏遺跡のものである。これらの環状ブロック群は類似度指数でみると環状ブロック群内全体が同一のグループになる傾向が強い点と、石器モードでは石斧モードの消費が著しく強く出る点で共通する。

III類には南三里塚宮原第1遺跡第2地点北側環状ブロック群と出口・鐘塚遺跡のものが該当する。これらは類似度指数によるグループ分けでは環状ブロック群全体が同一のグループになる傾向が強い点と、石器モードによる分析では母岩消費地が特定の箇所に集中し、他の地点の遺物分布が著しく散漫する傾向が強い点で共通する。

考察と展望

I類の環状ブロック群は石材・石器製作の観点から環状ブロック群内部が複数のグループに区分できた。従来の考えではこのグループは単位集団と結び付けられるであろうが、今回の分析で単一の集団が環状ブロック群内で複数の異なる活動を展開していた可能性も提示した。よって、環状ブロック群の形成要因を探るためには一度

「環状ブロック群内のグループ化は集団又は世帯を表す」という前提を一度取り外し、より広域な視点から研究を進める必要がある。

Ⅱ類は石斧モードが顕著なため、それに関連する活動が集中的に行われた結果と考えられる。他の類型との関連性を今後検討する必要がある。

Ⅲ類からは他の類型環状ブロック群と異なり、石器ブロック群内のまとまりが見受けられない。母岩消費地以外の石器分布が散漫な傾向にある点からも、Ⅲ類は見せかけの環状ブロック群と捉えられる。

今回の分析を通して、環状ブロック群には規模・形状という外見上の差異以上に、石器石材・石器製作という遺物構成の点からも多様性があることが判明した。つまり、環状ブロック群の形成要因を解明するには一元的な説明は効果的ではない。更なる研究を進めるためには、個々の環状ブロック群の研究の積み重ねた上に、地域間の環状ブロック群を比較検討していく必要がある。

▽シンポジウム

シンポジウム「歴史にみる災害と復興」

アジア史コース 李 成 市

二〇一一年三月一日に発生した東日本大震災と大津波、さらに引き続き東京電力福島第一原子力発電所における事故は、かつてない深刻な事態を引き起こし、いまだに復興の見通しは明確になっていない。これまで史学会では、現代の課題に向き合いつつ過去を問うことをめざしたシンポジウムを開催してきた。このような経緯をふまえ、本年度は東日本大震災と原発事故が提起する諸問題を歴史学の課題として受けとめ、私たちが直面している困難な事態を歴史的に捉えることによって、復興への展望を得ることを目的とするシンポジウムを開催した。

災害を契機に様々な社会的問題を引き起こしたことは、日本では八八年前の関東大震災の経験と教訓があり、災害と復興についてはヨーロッパでも一七世紀におけるロンドン大火や、中国における黄河のもたらした災害と治水などから学ぶべきことは少なくない。大会準備委員会では、こうした歴史上の災害がシンポジウムにおける議論の対象となりうることを討議し、日本史、東洋史、西洋史、考古学各々の視点から災害の事例を具体的に検討すべく、各々の課題